

た慰霊碑建立がやっと許可になったことにより、白山郷開拓団の居住地跡に「日中友誼記念碑」を建立して、盛大な除幕式も行うことができ、大変に感激した次第である。

現地では、鄒淑琴という我が団の孤児の女性が、いつ行っても出迎えてくれる。両親と別れ別れになったのが七歳ぐらいのときで、当時のことや日本語は全然分からないが、今回の法要にも長男と出席してくれた。これからも、命のある限り日中友好親善に一層尽くしていきたいと、心から決意をしたものである。

## 国破れて惨禍あり

### 無法者に踏みにじられて

愛知県 大野 年 子

夢を抱き満州へ

昭和十六年一月二日、一宮駅から親族・友人に見送られ、夢と希望に胸膨らませ出発しました。

主人は、既に二年前から国費で新京国立法政大学の興農部に籍を置き、勉学中でした。渡満して驚くことばかり。零下三十度という寒さ、戦時下の日本の軍隊色に見慣れていたのとは大違いで官公庁の立派な建物、満鉄。広い道路をマーチョに揺られながらの楽しそうな風景は、王道楽土にふさわしい静かな街でした。

故郷を離れ知人もなく不安でしたが、日本人が多く、また官舎の方々ともすぐ親しくなり、毎日が楽しい幸せな日々でした。父も故郷の状況などを知らせてくれるし、私もできる限り父母に心配かけぬよう手紙を書きました。

昭和十八年六月一日、新京の病院で長男達郎を出産。早産だったので、心配して父が見舞いにきて初孫に会い、喜んで帰りました。そのころの一宮地方は、軍需工場の多い名古屋近辺なので、既に空襲は激しく、そのため防空壕を掘り爆撃に備えているというところでした。日本は神国だから必ず勝つと軍国色で育った私は信じていました。しかしそれから二年後にソ連軍の侵攻で平和は一瞬にして崩れ、想像もつかない激動の日々

が訪れました。

### 夫の出征と疎開

昭和二十年八月一日、予期していたとはいえ召集令状を受け取ったときには、主人も何を考えていたのか一言もありませんでした。きつと私と同じように、今までの幸せも終わり、夢も希望も砕かれ、絶望的なやるせない気持ちだったと思います。日本では召集で出征する時は、近所の人、知人や肉親に送られ盛大なのに対し、夫の場合は黒龍江の中隊へ一人で出掛けました。未熟児で生まれた達郎は二歳二カ月、まだ歩くことも充分でない弱い子供のことを心配して、「できるだけ早く親元に帰れるようにと役所の方にもお願いしておいたから」と言い残して出掛けました。

そのころはもう交通の便もままならず、切符も手に入らないので色々お骨折りいただいている矢先の八月九日夜、「ドドン、ドドドン」という地震のような響きに驚き、表に飛び出してみると、同じように近所のあちらこちらから出てきて、だれ言うこともなく「ソ連の飛行機だ、戦闘機だ、ソ連が侵入してきた」。そ

んな馬鹿な、不可侵条約を締結しているソ連がまさか攻撃してくるとはと、驚きました。しかし、まさしくその通りでした。一回、二回、ソ連戦闘機の爆音が響きます。ソ連との戦争が始まったのです。ほとんどの男性は召集、学生は動員、残っているのは婦女子です。朝早々に役所からの連絡で、ソ連軍が国境に侵入して戦闘が開始されたとのことでした。ここには危ないから、必需品だけ持って他の荷物は整理し、荷造りして宛先の住所氏名を付けるようにと指示を受けました。爆音が続き一晩中恐怖と不安で身の縮む思いでした。

翌日鶴田さんと中国人の二人に手伝いにきてもらい、大助かりでした。主人が日本に帰るとき書籍だけは持ち帰ってくれと言い残したので、一生懸命荷造りをしました。後で思えば、敵が侵入し戦闘が起きようとしている混乱の中、そんな馬鹿なことなどできるはずもないのに、冷静さに欠けた自分の欲望に恥ずかしくありません。鶴田さん（病弱が原因で兵役を免れた）が駅まで送ってくださることになり、達郎は鶴田さんに背

負ってもらい、私はリュックサックいっぱい衣類、貴重品、食料と持てるだけ持って、十一日正午、隣組の方々と班を組み大変な混雑の中、役所の方からの引率の指示に従って、四、五列ぐらいに並んで駅に向かって歩きました。南嶺方面より日本の戦車、装甲車が列をなして続き、緊迫した空気が漂いました。国境方面へと戦闘に向かわれる途中だったので。「お互いに頑張れよ」「頑張ってるね」「元気でね」と、お互いに声を出し励ましあいながら歩きました。汽車に乗るのも関東軍、満鉄、官庁、一般の家族と順番が決められ、駅周辺は順番待ちの疎開者で大混乱でした。乗車してから疎開先が安東と知らされました。鶴田さんには役所の仕事もあるのに、乗車するまで見送っていただき感謝しています。

安東に到着して朝鮮の方々の温かい出迎えてで小学校の教室が与えられ、親切なもてなしで早速におにぎり、汁物を出していただき感激でした。

### 敗戦と同時に難民に転落

無事二、三日過ぎた正午前、班長さんが「ラジオの

ある一室に集まってください」と連絡にこられて集まったところで、「これから重大ニュースがありますから静かに聞いてください」。間もなく放送が始まりましたが雑音が入りよくわかりません。そのうち急に男性の方が「日本は負けた、降伏したのだ」と叫んでワッと泣き伏してしまい、初めて天皇陛下の玉音、終戦と知りぼう然としました。

今まで親切だった朝鮮人は、手のひらを返したとはこのようなことでしょうか、食事は一切なく外出禁止、持ち物の検査だと言い、刃物類、薬類は没収、体温計までもと、午前とはうって変わり敗戦国の難民となりました。監視付きで、何を命令されようが自由な行動もできず、阻止することのできない難民の悲哀です。

今後のことを、班長さんと男性が集まり相談していました。武装解除になり、家族が安東に疎開していると聞き訪ねてこられた日本兵も、警戒が厳しく近寄ることができません。それを無理に近寄ろうとした男性が、窓から見ている私たちの前で暴力を振るわれました。

敗戦と同時に日本人は無力で無抵抗です。三、四日分

と考へて持ってきた非常食もだんだん無くなり、逃走を決断しました。

### 死と隣り合わせの後戻り

班毎に逃走するから、見つからぬよう用意して夜の更けるのを待ち（希望者十五、六人程）、班長の誘導で出ました。どこをどう歩いたか分かりませんが、随分歩きました。都合よく暴民に見つからずに済みました。開拓団の方、奥地満鉄の仕事に従事していた家族など、お互いに励まし助けあいながら歩きました。二晩ぐらい野宿もしました。私は一人の子供、三人も四人も連れた奥様は困難でお気の毒でした。私の班の沼田さんは四人のお子さんを連れて一緒に歩きましたが、ついて歩けそうもないので先に行ってくださいと言われ、班長も仕方なく別れましたが、新京に着いてからも消息は知れませんでした。雨が降り出し濡れ鼠です。親切的な朝鮮人（日本女性）に畑の見張り小屋に入れてもらい、トウモロコシを七、八本持ってきて雨の止むまでここにいるようにと言われ、有り難く感謝しました。

疲労もかなり深かったのですが、新京に着けば主人も解除になって待っていてくれるのではと、希望を持って歩きました。線路づたいに歩き、汽車が見えてきました。どこの駅だったか記憶にありませんが、もうすぐだと言われても足が出なくなり、班長さんが子供を背負って助けてくださり、歩いてようやくたどり着きました。しかし停車している汽車は満員で乗れません。その時中国人が無理やりでも窓から乗るようにと班長さんに話をし、私たちを先に乗せ、班長さんと男性二人が後から乗り、やっと安堵いたしました。地獄に仏とはこのような方と喜び感謝いたしました。中国人と一緒に奥様も両親が新京において、三人のお子さんの面倒を見に行くところと聞きました。中国人の暴民もいる中で、日本人によくしてもらった人は、決してその恩は忘れていなかったと思えました。無事ご両親にお会いできて日本に引揚げられたでしょうか、と思ひ出します。幾度となく汽車は止められ、ソ連兵が金品を略奪します。一番に腕時計を要求し、出せば汽車は動きません。停車したとき女性の悲鳴が聞こえ、外を

見ると女性が強姦されているのです。とても直視できません。一方では、日本男性が衣服をはぎとられ痛めつけられ立ち上がることもできない状態です。野蛮な行為を軽蔑します。新京駅に着いたのが九月上旬のころ、駅には武装したソ連兵が銃を抱え警備しています。暴民、難民で混雑しています。同じ役所の田中さん、豊場さんのご家族も、一緒に無事に帰ることができて喜び合いました。班長さんにはひとかたならぬお世話になりました。

#### 共同生活の始まり

我が家に着くと官舎住宅周辺は驚くばかりの変わりようです。疎開で留守の官舎は、北満からソ連軍の侵攻で避難してきた開拓団の人たちの收容所になっていたのです。着のみ着のまま逃げてこられ、帰ってくるのかどうか分からない空き家に入り、利用できるものは自分のものも他人のものも区別なく利用されていたので、私が戻ったとき、詫びてくれました。吉津さんご夫婦、娘さん（十六歳）、息子さん（十二歳）の四人、長沼さん母娘三人、所さんは息子さん夫婦と別れ

別れになり、一人で吉津さんと一緒に逃げてこられたとか。これだけの家族との同居生活が始まりました。久しぶりに足を伸ばして休むことができました。日本人避難民が国境の各地から新京に宿を求めて歩いてきたところを、中国人の暴民が襲いかかり、少しばかりの着物を引きはがすやら、中国人同士でその着物を奪い合うありさまは、まさに地獄でした。ソ連側の野蛮で非人道的な行為が伝わってきます。女性の大半は髪を切り坊主頭、男性の作業服など身にまとい自衛するよりほかはありません。日本男性も無力で助けてはくれません。助けに行けば自分の命が危なく、どうすることもできないのです。治安は悪く全くの無政府状態です。避難民の中には逃避行の疲れと栄養失調が重なり、道端に倒れる者も出て、悲しい情景が毎日続きました。

#### 懸命な食料の調達

満州は、九月になると秋風が吹き、間もなく厳寒の冬がやってきます。食料、燃料の心配をせねばならず、そんな折、鶴田さんから役所からの分配品だといって

八百五十円いただき、それで吉津さんと一緒に缶詰、米、石炭を買いに行き、リヤカーで幾度も運びました。みんな集まるといつ引き揚げられるのか、いつまでこんな生活が続くのか、そんな話ばかりでした。

吉津さんは家族と一緒に逃げてきた方々の食料の調達といっても、お金はなく苦労されました。農家に行き手伝いをして、その代償として高粱、トウモロコシ、馬鈴薯など持ち帰り、それでコロッケなど作り、新京神社や公園の闇市に売りに行き収入を得ておられました。留守中は女子供だけですから、いつ暴民の襲撃があるか心配でしたので、一人の男性をみんな心強く頼りにしました。

夫を尋ねて悲痛な呼び掛け

日本の兵隊さんの中には、いち早く離脱に成功され、家族のもとに戻られた方もおられました。田中さんほか二、三人の方々と、捕らわれた日本人が収容されている学校、寮、そして南嶺の兵舎などに毎日出掛けましたが、見張りが厳しくてとても近くまで寄り付けません。大きな声でただただ名前を呼ぶのみです。警備

兵に見つかり銃口を向けられて、一目散に逃げて帰ったこともありました。日本人捕虜が新京駅に向かう長い列を眺め、大きな声を出し「元気でお帰りを待ちます、お体を大切に」と口々に涙ながらに叫ぶのです。

敗戦国民の悲劇です。近づくことはできませんが、中には紙切れに何か書いて、慰問袋で送られた石けんを包み一緒に投げる人もいるのですが、拾うのにソ連兵の監視が厳しく、少しでも近寄るとすぐ銃口が向けられ、「ドバイ、ドバイ」と追ってきます。住宅内の官公庁の幹部の方が現地除隊され、家族と一緒に数日過ぎされたある日、突然、ソ連兵が侵入し連行されそれきりでした。こんな話があちらこちらで聞かれました。

十一月ごろまで、国境の各地から難民となった人々が、雪の舞う中、着のみ着のまままで新京にたどり着きました。収容所に入れた方は良いのですが、入れない方は十分な食料もなく栄養失調などで亡くなり、家族がバラバラになり、扶養者を失った幼児が道端にはい出して泣きわめくありさまは、とても酷く悲惨でした。また収容所においても、母一人で誰の助けもないため、

大勢の子供を抱えた母親が食料に困り、親子飢えに苦しみ、命を断つよりは中国人に託せば生き延びられるのではないかと、母親としての切ない辛い思いで子供を手放した人もいました。このような孤児が中国人に育てられたのだと思います。

#### 野獣と化する無法の町

治安は悪化し、難民の惨状は筆舌では表すことのできない状態でした。ソ連兵の略奪、横暴極まる噂が伝わってきます。住宅街では自衛のため隣組が団結して、被害を最小限度に食い止めるしかありません。ソ連兵の出現を察知したらお互いに知らせ合う、若い女性は床下や天井に隠れる。女性を守るのに知恵を絞って、男性は部屋の細工をしたり一生懸命でした。

十一月末ごろ雪の降る寒い午後、隣の田中さんから知らせをうけるが早いのか、大きなソ連兵が戸をけとばして土足のまま入ってきました。びっくりして逃げ隠れする暇も余裕もなく、せっかくの床下にも天井にも入らず、みんな表に飛び出しました。私は、無我夢中で達郎を抱えましたがどうすることもできず、部屋の

角の窓際のカーテンの陰にガタガタと座り込んでしまいました。吉津さんが私のそばにきて「早く表に」と言われても、震えが止まらず、立つことも動くこともできませんでした。それを見た吉津さんは私の前に立ち、彼らが近寄らぬよう手真似で要求に応じ、一刻も早く立ち去るよう体で私を隠して守ってくださいました。見つければもうダメだ、絶望感と恐怖感で脳裏に浮かぶのはソ連兵の餌食になって死んでいった若い女性のこと、思わず神仏にお守りくださいと祈るばかりでした。

幸い達郎も泣くのも忘れ、一言の言葉も無く助かりました。金品の略奪は阻止できなくとも、我が身は餌食にだけはなりたくない一心で達郎を抱き締めました。時計、ラジオ、万年筆、彼らの一番のお気に入り時計で、四つも五つも腕に巻きご満悦です。文化や教養の程がおのずとしみでていました。気に入らなければすぐ殺してしまうソ連兵の前で、私たち親子を守ってくださいました古津さんに感謝いたします。同居人全員無事で喜び安堵いたしました。ソ連兵は、ジープで乗り

つけて満載になるまで何軒でも入り略奪していきます。衣紋竹までも珍しそうに意気揚々として引き揚げます。ソ連兵の姿が見えなくなるまで生きた心地もありませんでした。

ある程度の品は天井、床下に隠しておきましたので、満人の集まる校庭、公園などの闇市に持って行き、買ってもらうのです。「これは駄目だ、子供なら買う」と迫るので、「子供は大事な一人息子、餓死しても売らない」と大きな声で争います。達郎も、そのときの怖かったことは記憶に残っていると云います。

#### 恐怖の内戦

三月ごろ八路軍（現中国共産党軍）と国府軍の内戦が始まり、突然電灯が消え真っ暗、水道は止まり、「ダダン、ダダダン」「パン、パン、パン」耳を引き裂くような銃撃の音。私ども同居人全員は、床下に入り難を逃れましたが、驚いて外に飛び出した人が、幾人も流弾を受けて命を落とし、家族の泣き叫ぶ姿にいつそう戦争の恐ろしさを痛感しました。新京も戦場になるのを覚悟しておりましたが、夢から覚めたように三

日ぐらいで八路軍はいなくなり、急に静かになりました。住宅のあちらこちらの壁には弾痕があり、激しかった内戦を物語っていました。

八路軍の兵隊の中には日本人も多数参加していました。独身女性は一般家庭から差し出し命令を受け従軍看護婦として、また一般兵士として参加。親の気持ちを察すると、敗戦国民の無抵抗な立場の悲劇です。負傷した兵隊が戸を叩き助けを求めてきますが、同胞の日本人と分かっている相手方から誤解を招くとそのときは周囲にいる者皆銃殺です。手を合わせて一人の命よりも大勢の命の方が大切と、息を殺してただ無事を祈るのみでした。

終戦前の新京は、実に明るく活気に満ちた街で、新京駅から望む南嶺までの美しい街路樹、秋になれば大平原に真っ赤に落ちる地平線上の太陽の壮大な美しさには魅了させられました。戦争、内戦という忌まわしい出来事に、戦争こそ人間の理性を失わせる悪魔としか思えない、荒れた町並み、凄まじい人の心。ある中国人が「満州事変で中国は日本に侵略され、土地家屋

は没収され、中国人は流浪し、あるいは戦場に、罪もない婦女子までも刑場に、肉親とも引き裂かれて、満州国の十三年間を苦しみ生きてきたのだ、今の日本人以上だ」と言っていました。敵愾心を持って快く思わずに危害を加えてくる暴民の言い分でした。一方で主人と役所で同席だった中国人は、大変親切に物資など運んで慰めてくれました。同じ国民でも自分の立場立場で、こうも違うものだと思います。

#### 地獄の貨物列車

隣組の集合で、日本人会の方から「引揚げが間近だから名簿を提出するように」と嬉しい報告。待ちに待った引揚げで、みんな久しぶりに笑顔で喜びました。それから一週間ぐらい経った七月上旬だったと思います。が、日本人会の方から「出発の準備をするように」と連絡が入りました。そのころ達郎が腸を壊し下痢が続いており、医薬もなかなかままならず道中が心配でした。かさばらない衣類をおしめにしてたくさん詰め込みました。家具など残った物は、親切にお世話くださいました中国人に譲り、片付けていただきました。両手には

持てるだけの食料を持ちました。

出発の朝、もう来ることもない我が家、希望と夢を抱いて暮らしたこと、また終戦後生死をかけて必死に達郎を守りながら生き延びたこと、市街戦の折の恐怖感などが走馬灯のように脳裏に浮かび、涙がとめどなく流れました。四年八カ月住み慣れた宝清胡同の官舎とも決別しました。大同大街を歩きながら主人の勤めた役所、買い物に出かけたニッケルの隣の三中井百貨店、ダイヤ街の宝山百貨店など思い出深い建物を後に夕方駅前に着きました。

順番待ちで野宿同様に一晚過ぎ、明け方乗車したのは材木などの輸送に使う無蓋貨車です。一台に幾百人と乗せられましたが、男性の計らいで婦女子は中央の方に、周囲には板も鎖さえもついていない貨車の隅に男性が座り、私どもを守っていただき感謝しています。走行中、貨車と貨車の連結の上にはいた女性の悲鳴が聞こえましたが、そのままでした。辛抱できずに用を足していたらしいとか、お気の毒でした。

列車は駅でもないところに停車し、機関士のゆすり

に従い金品を出すすと再び貨車は走り出します。停車している間に一斉に男も女も用を足しました。恥も外聞もなく、急ぎ幾千人の人が一度に用を足すのですから大変な混雑、しかも乗り遅れては大変と急ぐのですから余計です。心配していた達郎もおかげで快方に向かいました。吉津さんの奥様が何かと親切にお世話くださり感謝しています。

十六日間の長旅で錦州に着き、日本兵舎だったところが収容所でした。私たちに与えられた所は馬小屋でした。ちょうどその日小雨が一日中降り、下で休むどころではありません。男性の方が藁を持ってきて、その上に手持ちの衣類など敷き、子供は休ませました。自炊をしながら乗船の順番を待つことになりました。洗面器と小さな鍋が唯一の道具です。お金の手持ちがあり、お米一升二百円で買い、野菜など朝鮮人がいろいろ売りにきましたから、ここでは空腹になるようなこともありませんでした。高粱、とうもろこしなどで作った餅など美味しかった記憶があります。どうせ千円しか持って帰れないお金です。しかし、無銭者の方

にも頼んで持ち帰ってもらう方も見受けました。

#### ああ引揚船

二、三日だったと思います、コロ島から乗船するまでの長い道中、検査・消毒を受けながら列は進みます。疲労と飢えが重なり幾人も人が道端に倒れ、我々の行列を目を開けて眺めていました。リュックサックを持ったまま目、鼻、口に蠅が真っ黒に集まり、払うだけの気力もなく悲惨な姿、また息絶えている人、正視できませんでした。手を合わせ通り過ぎました。乗船間際に背負っている我が子の死を知り、泣きながら乗船し、船内で幼児を膝に抱き締めていた女性がおりました。この女性の三人の子供も母親の体にならから前から一塊になって泣き崩れていましたが、男性方の計らいで幼児は水葬にされました。ご主人は逃げる途中別れ別れになり、話ではもう殺されているでしょうと寂しそうでした。難民の悲哀、胸が痛みます。

国境に近い開拓団の方々が被害も大きく、犠牲者も多くお気の毒でした。生きて故国の土を踏むのを待ちながら、無念の思いで倒れ異国の土となった方々を思

うとき、ご冥福を祈らずにはいられません。運よく帰国できたことを改めて感謝します。

私たちの乗った船は日本船でした。一番底の板敷きのところが、寝るところと休むところでした。食事は、麦ご飯の中にいろいろなものが入っていたのを覚えています。二日ぐらいで港の明かりが見え始めたころ、船内からチフス患者が出たので、二週間の延期が告げられ、沖に停泊することになりました。港の灯を眺めて上陸できる喜び、もしかして主人が要領よく難民に混じって、先に引き揚げてきているかもしれない。そんな期待を抱きながら感激で胸がいっぱいでした。そのときの喜びは筆では表すことができません。ただただ涙でした。同じ境涯に身を置いた者だけが知ることのできる喜びです。

#### 戦禍に埋もれた実家

上陸と同時に白いDDTを頭から散布され驚きました。午後上陸が始まりましたが、消毒、検査、手続きと手間取り、一晩夜を明かし待つことにしました。鶴田さんが一宮まで送ってくださることにになり、吉津さ

んご一家と所さんと一緒に臨時列車のすし詰めのお客車に乗りました。駅に着けば窓からでも人が入ってきました。一宮に着くまで空襲で被害を受けた町を望み、引揚者の我々ばかりでなく、国内でも戦争の悲劇は変わりないと思いました。一宮に着き、山形に帰られる吉津さん、所さんにお礼を述べ、再会を約束してお別れいたしました。

奇しくも一年前安東での思い出、苦い敗戦の日十五日、難民の始まりの日に一宮駅に到着しました。荒廃した市中、駅前には屋台店が軒を連ね、空爆の跡もいまだ生々しく、駅員の方から聞くところによると、七月二十八日、二十九日の両日、B-29の爆撃で被害を受けたとのことでした。一宮の多くの人が犠牲となり、また焼野原となり、防空壕に直撃を受け全滅の一家もあった由、聞かされて戦争の傷跡の凄まじいことを感じるのと共に、両親の安否が気に掛かり心配しました。

元の住居に行き、小屋があるのを見付けて入り口から入り、両親の姿を見て「ただ今帰りました……」。両親も、立って迎えてくれましたが、言葉もなくぼう

然としていました。それもそのはず、私は坊主頭、ヨレヨレのモンペ姿に驚いたに違いありません。

しばらくして初めて母が「年子か」と呼んでくれました。同時に私は母にしがみつき共に声を出して泣きました。達郎は、おびえてなかなか鶴田さんから離れようとしませんでした。きつと満州での恐ろしかった出来事を子供心にも思い出していたのだと思います。

新京を出てから三十四日ぶりの垢を落として、坊主頭で恥ずかしく思いましたが、近くの銭湯に達郎を連れて母と出かけました。道で会う方が母に「よかったね」と声をかけられ、やっと帰れたという実感がわき、熱い涙となりました。母の心尽くしの白いご飯と味噌汁の味が今も忘れられません。

### 生きるための再出発

やはり主人は帰ってはいませんでした。あとで聞いたのですが、ソ連軍の侵攻によりすぐ捕らわれの身となり、シベリアに連行され三年の抑留生活を送ったそうです。主人の実家が近く、義兄と義母が訪ねてきて、無事を喜んでくださいましたが、義父がやはり空襲の

犠牲になったとのことでした。義兄は職業軍人でしたが、運よく復員してこられ、主人の消息だけが気掛かりでした。

鶴田さんには一泊していただき、義兄と体形がよく似ていたので新しい服に着替えていただき、天草に帰っていただきました。お元気でいらっしやるのでしょうか、住所を聞いておけばと悔やんでおります。

母の弟が農家でしたので、幸い食料などには困らずに、私も達郎も元気になりました。主人のことも気になりましたがどうすることもできず、先のことも考え知人の勧めで母に子供を託し、一宮は織維の町、戦災を免れた北陸の富山の田舎方面に親戚を訪ね、綿反物の行商に出かけました。汽車は闇米の買い出しの人で身動きもできません。闇米を持っている人たちは窓から乗り降りをするし、警察の取り締まりに追われ大混乱でした。慣れない行商で思うようにはならず、勤めにも出ましたが、結局家でできる仕事と、既製品のミシンの内職に変わりました。自分の努力次第で高収入が得られるようになりました。

夫の復員そして就職

昭和二十三年七月末、主人が舞鶴に復員してきたとの知らせで、達郎を連れ義兄と三人で迎えに出かけましたが、思想面で取り調べがあるからと会わせてもらえず、ようやく八月一日に釈放されました。やせ細った栄養失調の体、目だけがガラガラと疲れ果てた姿は別人のようでした。義兄の「ご苦労さま、お帰り」の言葉にもうなずくのみで声はなく、目に光るものを浮かべても言葉はなく、達郎を見て無事な喜びでしようか、そっと引き寄せ抱き、しばらくは無言でした。いかにシベリアの生活が過酷だったかを伺い知ることができました。シベリアの生活を尋ねても、いまだに語るうとはいたしません。

主人が復員してからは主人の実家で厄介になり、半年ほど私の仕事の手伝いなどしながら体の回復に専念いたしました。その後、職を求め一年半ほど勤めましたが満足できず退職しました。

昭和二十四年に長女も生まれており、男として家族に対する責任感もあったと思います。知人を訪ね相談

しましたところ、早速銀行を紹介してくださり、運よく採用され、知人に感謝いたしました。生活の目鼻も付き、いつまでも実家に厄介になっているのも心苦しく、銀行の先輩の計らいで田舎の離れを借り、親子だけの生活が始まりました。銀行まで一時間ぐらいかかりましたが、不安で危険な満州と違い幸せでした。私も内職に励みました。

二十七年三月には次女も生まれ、少しばかりの貯えもできたので、住宅金融公庫を利用して現在の所に新築いたしました。三十一年でした。子供たちも狭い間借り生活から自分の家ということで大変喜びました。

親の苦労をよく理解して無理は言わず、あまり心配も掛けなかった子供にも感謝しています。三人の子供の成長こそ希望で、夜遅くまで呉服屋さんの和裁をし、娘のころ習った生け花を生かし教師として文化センターに出かけました。生け花は今も自宅で続けております。

子供たちも片付き二人だけの生活になりましたが、これからは若いお弟子さんと共に余生を楽しみたいと思います。主人も、無事銀行の支店長の職を守ること

ができ、定年後も勤めましたが、七十歳のとき大病を患い退職いたしました。十年経った今も一カ月に一度は病院通いですが、なんとか元気に悠々自適の生活を過ごしております。両家の両親も今では亡くなりませんが、親が健在であったからこそ今の私どもの幸せが得られたと、この恩は忘れません。

昭和の激動を語る世代が少なくなり、戦争体験が風化していくことは、我々体験者が段々減っていくように、寂しい限りです。敗戦から五十余年、長い月日で記憶も年々薄れて、過ぎ去ったところが夢のような気がします。

平和な今の日本が後世にいつまでも続きますよう祈ります。

今日も暮れゆく

香川県 中村 品子

その地の名は、満州国東滿総省寧安県蘆屯開拓団で

ある。蘆屯開拓団は、郷里の四国香川県にある屋島に似た山麓に広がる大地に開拓された。

昭和十三年、父三十八歳。日本国の食糧増産の任を背負って、単身で満州へ渡った年である。当時の四国新聞の切れはしには、「征け！ 我らの戦士」の見出しの中で「功ならずんば死しても帰らぬ決意——」と、父が答辞を述べたものが残されている。

未開の大地、そこにれんがの家を建て、学校を造り、一応の生活ができるようになって家族を呼び寄せたのが昭和十五年の春である。一枚の小さな写真、裏には母の字で、「昭和十五年七月、品子（私）小学校一年生」と記されている。寄宿舎の前に並んだ写真には、女の先生一人と男女の子供が十五人いる。

開拓団の部落は五つに分かれていた。入植三年にして、団員は百二十三人、これに妻子を加えて四百六十三人の大家族になっていた。開墾した水田百町歩、畑七百町歩、水稲、小麦、大麦、大豆、馬鈴薯、精穀物にはヤンマー十五馬力の発動機も取り入れた。自家用を差し引いても、供出するには十分の成果が上がるよ